



ひと、つながる。
墨田区

本号より、発行月が変更になりました。
3月・7月・11月発行予定です。



すすめよう、 すみだの多文化共生

■墨田区の住民

23人にひとりとは外国人

ネパール料理店が増えたなあ。あのコンビニの店員さんはベトナムの人かな? そんなふうに感じることも多くなりました。街のなかで会う外国人が増えたと感じる一方、職場や子どもの学校、同じマンションの住人など、仕事や生活のなかで外国人と日常的に話すという人はまだ少ないのではないのでしょうか。

「多文化共生」という言葉を知っていますか。以前は「国際交流」といいます。

「多文化共生」という言葉を知っていますか。以前は「国際交流」といいます。



160回以上実施している「みんなで散歩」
タイ出身のスタッフがガイドを務めます

言葉がよく使われていたので、耳慣れないかもしれません。交流するだけでなく、同じ国や地域に暮らす住民として、互いに認め合い、みんなが暮らしやすい社会にしよう、ということだと思っています。

墨田区の外国人数は、20年前は約6千人でしたが、5年前に1万人を超し、現在(2021年6月)は1万2193人。墨田区民の約4.4%、23人にひとり外国人です。最も多いのは中国出身者(外国人住民の約47%)。続いて韓国、フィリピン、ベトナム、台湾、タイ、ネパール、米国、インド、バングラデシュが上位10の国と地域です。

迷ったら、日本語で話しかけよう
顔見知りの外国人に声をかけたけれど、かけられない、という人も多いと思います。外国人だから英語? いや、中国の人にはまず「ニーハオ!」かな。悩んでしまい、話しかけるきっかけがつかめないというものです。そんなときは日本語で

「こんにちは!」と話しかければ大丈夫です。伝わらなければ、英語やほかの言語、ジェスチャーを総動員して、伝えてみましょう。きつとよいコミュニケーションができるはずです。

外国人にとって日本の暮らしは、わからないことが多いです。病気になる、学校や幼稚園の行事や持ち物、保育園と幼稚園の違いなど、困ることが多くあります。そんなときのちよつとしたアドバイスはとても喜ばれます。

また、日本人といろいろな話をしたいという外国人の思いをよく聞きます。食べ物や子育ての方法など、ぜひ話をしてみてください。異文化に触れることはお互い楽しい時間になることでしょう。

■実はすごい、墨田区の外国人対応
当社は、「外国人と日本人をつなぐ」をテーマに事業をしており、墨田区役所の様々な事業にも関わっています。先進的な取り組みを紹介いたします。

「ごみ分別案内チャットボット」
ごみはぜんぶ一緒に捨てるといいう国もあります。日本のごみの分別を難しく感じる外国人は多いです。

墨田区の「ごみ分別案内チャットボット」は、今年9月から外国語にも対応しました。AI(人工知能)が、ごみの分け方・出し方を教えてくれます。質問は日本語、中国語、英語でできます。回答は、外国人でもわかりやすい「やさしい日本語」とイラストで表示されます。



ごみ分別案内チャットボット画面
墨田区ホームページより

■多文化共生への第二步

私たちの会社には、タイと、モリ、子育て中のお母さんが話せる場を企画しています。外国人と働き、他の文化を知ること、とても楽しいです。

みなさんも、ご近所の外国人を気にかけてみてください。すてきな出会いがあるかもしれません。それは、すみだの多文化共生をすすめる一歩になるはずです。

(ひらがなネット株式会社

代表取締役 戸嶋 浩子)

すみだの伝統工芸

— 誂え足袋 —



白キャラコ足袋

■墨田区における足袋づくりの歴史

足袋の歴史は古く、一説には奈良時代からと言われています。墨田区では、花街の賑わいと共に、足袋づくりも発展してきました。

戦後の花街の様子について、向島墨堤組合の話によると、昭和26年（1951）には芸妓は600名の登録があり、待屋が150軒ほどあったようです。そして、花街に携わる呉服店や髪結い、洗張屋等が多数あり、足袋屋も数軒営業をしていました。

■足袋づくりとはどのようなものか

足袋製作にはおよそ20の工程があり、大きく分けると4つからなります。

最初は採寸。基本は代々受け継いだ専用の文規もんぎという道具とメジャーを用います。採寸前には、必ずお客様に、今履いている足袋のことや、用途、きつさ緩さの好み、そして出来上りの足袋のイメージ等を質問させていただき、さらにおお客様の性格をも読みとるよう心がけます。それから全てを頭に入れて、左右それぞれ30ヶ所の計測やチェックをし、専用の台帳に書きこみます。

次は型紙づくり。これらのデータ



上：丸包丁 下：つまつけミシン

を基に型紙を作成するのですが、数字だけでなく、お客様それぞれに合わせるつくり方を取り入れます。実のところこれが足袋づくり最大のテーマとなります。

そして裁断。機械で行うのが一般的なのですが、私共では今も、細かな又の切れこみやカーブにも対応できる丸包丁を使用しています。布地によっては、ずれることもあり、左手の押さえ方、力加減も重要な要素となります。

続いて、縫製の工程に入ります。5台のミシンを使い分けて各所を縫っていきます。縫製の最後に行くつまつけは、つま先の膨らみを出す作業で、約100年前のミシンを使用します。現在、師匠である父が主に作業していますが、お客様一人ひとりの足の形状に沿うよう細かく微調整しながら縫っていく必要があります。そのため、とりわけ高度な技術力を要

し、長い年月（経験）が求められる工程です。

その後、昔からの各仕上げ道具を使用して足袋全体を柔らかに馴染ませ、アイロンがけを行い完成となります。

完成後も、仕上がり

■足袋づくり職人として

もとを正せば、私は高校を卒業したのち、一般企業に就職するつもりでおりましたが、店を継ぐ決心をするに至ったのは、小さいときから親の仕事に近くで見てきたことと、店を行き交う芸者さんの、ピッタリ合ったきれいな足袋を見て「いつか自分も同じようにつくりたい」という気持ちもあつたからだと思っています。

今では、全国でも激減している誂え（フルオーダー）の製作技術を全て習得し、伝統工芸としての足袋づくりを受け継いでいきたいと考え

ています。また一方で、足袋を身近に感じてもらい、日常、ご自宅でも履いてもらえるような今の時代に合った商品を考案し、つくっていきたいとも思っています。

近頃は、外反母趾等の病気やケガのリハビリで足袋をご注文いただくことも増えました。足袋が助になれば、こんなに嬉しいことはありません。

■すみだの伝統工芸を担う

若手職人として

私が生まれた44年前の昭和53年（1978）に発足した墨田区伝統工芸保存会には、私も若手職人として入会しておりますが、他の伝統工芸の先輩達や切磋琢磨している同年代の仲間達と区のイベントを共に行なったり、時にものづくりへのこだわり、想いなどをお話させて頂いております。

これからも、ものづくりの大変盛んなまち、すみだの一員として、足袋製作の技術の向上を目指し、つくり手の方達、ひいては地域社会と交流を深め、現在まで脈々と繋がっているその歴史と心意気を次の世代に伝えてまいります。

（墨田区伝統工芸保存会

足袋仕立て職 石井 健介）